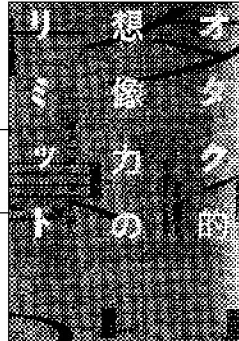


オタク文化がクールジャパンとして脚光を浴びるなか、著者は、興味本位な「オリエンタリズム」を超える正しい理解を求め、コスプレ、鉄道オタク、萌え、格闘ゲーム、腐女子などについて論述する。また、次の文献を収録して著を構成する。「小さな物語をデータベース消費する」とする東浩紀氏の『動物化するポストモダン』、「蛸壺の宇宙の中でつながりを求める」とする北田暁大氏の「喘ぐ日本の『嘘う日本のナシヨナリズム』」、「個室が都市空間に延長する」とする森川嘉一郎氏の「趣都（アキハバラ）の誕生」。いずれも、オタク文化に、近代を超えるポストモダンの可能性を見いだそうとするものである。

教育においては、その可能性を受け止めつつこれまでの大きな物語」としての歴史学等を彼らに伝えることが求められよう。

オタクの「想像力」について、辻泉氏は「（私自身が）なぜ鉄

オタク的想像力のリミット 〈歴史・空間・交流〉から問う



宮台真司 監修
2700円 筑摩書房
☎048-651-0053

道オタクなのか」という問いのもとに、敗戦までの「汽車の時代」を「空想の時代」、高度経済成長期の「電車の時代」を「夢想の時代」、低成長教育の「ポスト電車の時代」を「幻想の時代」、現在の「ポスト鉄道の時代」を「妄想の時代」と分析する。そして、このような「想像力の文化」を組み込んだ新たな社会を構想するよう提唱する。

宮台真司氏は、オタク・コンテンツが持つ「文脈の無関連化機能」により、「オリエンタリズム」の曲解が乗り越えられるのは時間の問題とする。教育においては、オタクへの興味本位な曲解は払拭した上で、先人の蓄積してきた文化・価値を伝承し、それを生徒の内的世界の「文脈」と関連付けさせ、彼らの想像の壁を日々破らせるようにしたい。

（聖徳大学教授・西村美東士）

